

報告書：フランスで出版された大学生向け日本語教科書の比較

プロバンス大学 秋 廣 尚 恵(2011.4.10)

1. 概観

まず、はじめに指摘しておかなくてはならないことは、フランスで出版された大学生向け日本語教科書は非常に少ないということである。フランス語で書かれた教科書は、主に高校生、そして一般人向けの（ビジネスマンから、旅行者、愛好家を含めた広い範囲の学習者を対象とする）教科書が主であり、大学教育の現場で使われるために書かれたものはごく少数にとどまる。

こうした数少ない教科書は、主に、執筆者が教える大学の授業で使われているのだが、フランス語で文法的な説明がなされているということから、普段このような本を教科書として使っていない他大学の学生達にも、自習用の参考書として使われることがあるようである。ここでは、その中でも近年出版されて、よく教科書や参考書として使用されているもののみを取り上げることにする。

2. 大学受験、大学の授業の準備のための CNED 通信教育

バカロレア受験者を対象とした日本語教材は充実している。その一つが、国立通信教育センター（Centre National d'Enseignement à Distance）が出している日本語教材である。レベルが 5 つに分かれ、文法、会話、読解、聞き取りの全般的な学習について、難易度の低いレベルから高いレベルへと授業が進められている。最終コースはバカロレア受験用の高校最終学年用の教材であるが、その教材では、文学作品や社会の教科書の内容などを読ませる練習問題も入っており、かなり高度なレベルに至る。実際、バカロレアの試験では、文学作品などのテキストについての内容理解を中心とした口答試験が課されているようである。<http://www.cned.fr/SearchResults.aspx?query=Japonais> で日本語の教材を注文することができる。大学への授業に備えて CNED を利用して学習している高校生がいるようである。

3. 文法書

フランス語で書かれた文法書としては、リヨン大学Ⅲの日本語学者である島森准教授が書いた *Grammaire Japonaise Systématique* がある。2 巻からなるこの本は、現在のところ、フランス語で書かれた、初めてのまた唯一の詳細な文法書だと言われ、学生にもよく参照されている。一巻目は、正書法、日本語の文構造の概観、述語の構造、そして単文、複文の構造について解説している。2 巻目は、主に動詞に関わる問題を取り扱っている。態（受動態・使役）についての記述に始まり、動詞の分類、時制、アスペクト、叙法、そしてモダリティの問題について書かれ、最後に、敬語の表現についてもかなり詳しい言語学的な記述をしている。

4. 文法解説と豊富な例文

日本語学者であり、グラン・エコール ENA, ESSEC の教授である桑江邦夫の文法解説書も、ながらく学生に参考書として親しまれてきた本である。桑江教授は、*Manuel de japonais volume 1* を 1979 年に出版、同じタイトルの本の 2 巻目 *Manuel de japonais volume 2* を 1980 年に出版した。これらの本は初級の日本語学習者に向けられた文法解説と例文を豊富に入れた「教科書」である。コピュラ動詞「です・だ」の構文に始まり、形容詞、形容動詞、動詞の丁寧形、ついで常体形、存在を表す動詞、動詞の連体形、連体節、数詞、助数詞、疑問詞、不定詞、類別詞、動詞の連用形、助動詞、終助詞と体系的に文法を解説している。上記にあげた島森の文法書と異なる点は、上記の本がもっぱら参考書でしかないのに対し、この本は、「教科書」としての作られたという点である。

桑江の文法用語の用い方は特殊である。例えば、いわゆる用言のテ形について、多くのフランスの日本語学者が、*forme suspensive* という用語を用いているのに対し、桑江は *forme gérondive* という用語を用いている。また、いわゆる「複文」は、普通、フランス語では、*phrases complexes* という用語に訳されているが、桑江では、*propositions suspensives* という用語が用いられている。

また、他の文法書に見られることのない、桑江の 2 巻本ならではの特徴は例文の多さである。付属のカセットテープを聴きながら、例文を覚えることによって、会話に必要な基本的構文、語彙をマスターできるように作られている。

2010 年に桑江が改めて出版した *Pratique du japonais* も、文法的カテゴリーにしたがって本が構成されている点では文法書としての性格が強い。序章では、正書法、発音、言語類型論的な観点から見た日本語についての説明が加えられ、第 1 章は動詞からはじまる。第 2 章は助詞、第 3 章にコピュラ動詞、第 4 章に形容詞、形容動詞。第 5 章に常体形、6 から 7 章では、用言の「て」形、8 章では形式名詞とそれにかかる連体節、9 章では複文、10 章では接続助詞、11 章では連体節、12 章では副詞節、13 章では助動詞を扱っている。

しかし、例文により会話を取り入れ、作文などの練習問題も入れ、より教科書として使いやすいようにという配慮が配られている。付属の CD もあり、全ての例文、練習問題を聞くことができるようになっている。

5. 会話とオーディオ教材をセットにした教科書

次に、大学教員によって執筆されながらも、大学生だけではなく、それ以外の一般の学習者にも広く用いられている教科書あげておく。一つは、東洋言語文化国立研究院で日本語学者として長らく教育・研究に携わっていた Catherine Garnier 名誉教授とパリ第 7 大学の森准教授が作った教科書—*Le Japonais sans peine* である。この本は、たくさんの会話形式の例文を音声を聞きながらひたすら覚え、直観的に言語構造を把握していくことを目指して作られたもので、特に詳しい文法の説明はない。文法については、例文の後に、注釈程度の記述があるのみである。ただし例文は非常に簡単で、例文を覚えていくうちに効果的に文法の構造がつかめるように作られている。以下に例文を示す。

- おはようございます。
- おはようございます。
- パンを食べますか。
- 食べます。

- コーヒーを飲みますか。
- 飲みます。
- ビールを飲みますか。
- 飲みません。

例文引用 *Le Japonais sans peine*, tome 1, p.10

また、各例文の後には、練習問題がついており、それによって、知識を定着させようとしている。簡単な文例から、次第に複雑な文例へと進んでいく。語彙の選択や文例は頻度の高いものが用いられている。会話の状況も、待ち合わせ、ホテルの予約、診察、郵便局、道を尋ねる、など、外国人が日本に出かけて総合しやすい状況を設定して作られており、短期でサバイバルのための日本語会話を学ぶためには効果的であると思われる。そうした意味もあって、大学生だけではなく、一般人にも広く用いられている教科書である。

6. 大学の授業用テキスト

以上に見たテキストは、大学への準備過程で用いる教材、参考書としての文法書、あるいは、暗記用例文集としての性格を持ち、あまり大学の授業で用いられることはない。以下に見るのは、いずれも大学の授業で用いられていた、あるいは現在も用いられている教材である。先にも述べたように、このような教材は非常に少なく、筆者が知る限りでは、この3つしかない。

- CHOLLEY Jean & SHIMAMORI Reiko (1990) *Cours de japonais*, Bonjinsha
- DELTEIL André, SEKO Yuriko & TAKEI Yuki (2006) *Japonais, manuel de première année*, Publication de l'Université de Provence
- HIGASHI Tomoko & OGUMA Kazuo (2006) *Parlons Japonais*, nouvelle édition, Presses Universitaires de Grenoble

以下、①Cholley & Simamori, ②Délteil, Seko & Takei, ③Higashi & Oguma と略すことにする。Cholley & Shimamori はリヨン第Ⅲ大学で、Higashi & Oguma はグルノーブル大学で現在用いられている教科書であり、Délteil, Seko & Takei は、プロバンス大学でかつて使われていた教科書である。3つの教科書を比較するためにを以下の表にそれぞれの教科書の内容をまとめてみた。「各課の構成」と言う項目には、各課がどのような内容から成り立っているか、それぞれの教科書に現れる順番で記してある。それ以降は、各課で取り扱われている文法項目のみを記してある。

文法項目	Cholley & Shimamori	Délteil, Seko & Takei	Higashi & Oguma
各課の構成	会話・テキスト 漢字リスト 語彙リスト 文法説明 文型リスト 練習問題 作文	会話・テキスト 語彙リスト 漢字リスト 文法説明 練習問題 作文	会話 語彙注釈 基本構文 聞き取り練習 表現練習 役割練習 語彙リスト 読解・作文・文法練習問題 文法解説 言語と社会コーナー
序章	言語類型論 発音 正書法 ひらがな かたかな	言語類型論 発音 正書法 ひらがな かたかな 漢字の部首と書き順の説明	発音 ひらがな かたかな 正書法 漢字の部首と書き順の説明 日本語の文体の差の説明 あいさつ
第 1 課	「XはYです」 「XもYです」 助詞「の」 指示代名詞 疑問詞「なに」 終助詞「か」（疑問）	用言と体言のちがい 「XはYです」 助詞「は」（主題） 助詞「に・の・で・を・から」 助詞「も」 動詞「ます」形 変格動詞「する」「くる」 指示代名詞 終助詞「か」「よ」 話し方の違い（常体と敬体） 丁寧な命令文「下さい」	「XはYです」肯定・否定・疑問 助詞「は」 助詞「も」 助詞「が」 接頭辞「お」「ご」
第 2 課	「XがYにあり・います」 「XはYにあり・います」 形容詞 形容動詞 動詞「ある」「いる」 指示形容詞 助詞「と」（並列） 助詞「や」（並列） 助詞「に」（場所）	1 段動詞・5 段動詞の表 助詞「に」「で」（場所） 助詞「も」 形容詞 助詞「が」（主語） 「という」	指示代名詞 指示形容詞 疑問代名詞 数詞
第 3 課	過去形「でした」 動詞の分類 動詞の「ます」形 過去形「ました」 助詞「に」（目的） 動詞＋「にいく・くる」 助詞「から」「まで」 格助詞「を」 「はい」「いいえ」	形容詞 形容動詞 指示形容詞 助詞「や・と・とか」（並列） 動詞「て」形 動詞「て」形＋から 動詞「て」形＋もいい 動詞「て」形＋ください 動詞「て」形＋いる 動詞＋「にいく・くる」 動詞＋「たい」 名詞＋にする	過去形「でした」「ました」 動詞「ます」形「ましょう」形 助詞「を・に・で」 形容詞 形容詞「て」形 形容動詞「で」形 助詞「と」（並列）

第4課	形容詞の過去形 格助詞「が」 「が」と主題「は」の違い 主観を表す表現（ほしい・好き・嫌い・上手・下手・得意・苦手） 接尾辞「たい」（願望）	動詞＋「かた」（方法） 接続助詞「が」（逆接） 動詞「ございます」 形容詞・形容動詞の「て」形 主観を表す表現（ほしい・好き・嫌い・上手・下手・得意・苦手） 動詞「（よ）う形」（意思） 助詞「の」（形式名詞） 助詞「鹿」＋否定 動詞＋「すぎる」 助数詞・類別詞 疑問代名詞 疑問代名詞＋「も」 助詞「と」（引用） 動詞の意志形＋「と思う」	形容詞「くありません」形 形容動詞「ではありません」形 動詞「行く」と助詞「に・へ」 動詞「ます・ません」形 動詞「ました・ませんでした」形 疑問代名詞
第5課	助数詞・類別詞（本・枚・冊・人・匹・台・羽・通） 用言の「て」形 動詞＋「たがる」 動詞「て形」＋います」 接続助詞「から」（理由）	常体と敬体のちがい 関係詞節中の主語 動詞＋「なる」 動詞＋「ことがある」 動詞＋「こともある」 動詞＋「ことが多い」 動詞＋「ことにする」 動詞＋「ことにする」 動詞＋「ことにしている」 動詞＋「ことになる」 動詞＋「たり」 連体修飾節＋「とき」 授与動詞「くれる」「もらう」「あげる」 動詞「て」形＋「くれる」「もらう」「あげる」 動詞「て」形＋「いく・くる」 「XをYにする」 動詞＋「たら」 間接話法 名詞化「の」 動詞＋「ながら」 動詞「て」形＋「みる」 動詞「て」形＋「しまう」 動詞＋「ので」	一般動詞 頻度の副詞 時間の表現 助詞
第6課	用言の「た」形 用言の「ない」形 動詞＋「てもいい」 動詞＋「てはいけない」 動詞＋「てください」 動詞＋「でしょう」 動詞＋「たり」 動詞の「て」形＋「ある」	「Xがなくて」 連体修飾節＋「間」 連体修飾節＋「前」 連体修飾節＋「後」 連体修飾節＋「ところ」 「かどうか」 「もらう」と「いただく」 「の（ん）です」 動詞＋「ほうがいい」 動詞＋「ないでください」 用言「ば」形（条件） 「動詞＋ばいい」（忠告） 接尾辞「ずつ」 期間の表し方	形容詞「かった・くなかった」形 形容動詞「だった・ではなかった」形 動詞＋「いく・くる」 形容詞「ない・た・なかった」形 形容動詞「ではない・だった・ではなかった」形 動詞の「ない・他・なかった」形常体 用言＋「んです」

第7課	連体修飾節＋「とき」 連体修飾節＋「まえ」 連体修飾節＋「あと」 連体修飾節＋「間」 助詞「と」（引用） 間接話法 比較 最上級 定義をする表現「という」	動詞の可能形 動詞の可能形＋「ようになりまし た」 名詞＋「のように」 動詞＋「ように」 名詞＋「ようだ」（様態） 動詞「ば」形＋「ならない」 動詞「て」形＋「はいけない」 動詞「て」形＋おく 比較・最上級 助詞「なら」 動詞受身形 接続助詞「と」 接続助詞「し」 助動詞「らしい」（推量・様態）	授与動詞「あげる・くれる・もら う」「さしあげる」 動詞「て」形「ください」 動詞「ない」形「てください」 動詞「て」形＋「いる」 日にちの言い方
第8課	「の」・「こと」による名詞化と それを用いた表現 「ことがあります」 「ことになる」 「ことがない」 「のは」 「のを」 動詞の可能形 動詞＋「ましょう」	複合格助詞　での・からの・まで の・への 「でしょう」（推量） 動詞使役形 助詞「ばかり」 動詞使役受身形 連体詞「あんな・こんな・そんな・ どんな」 名詞＋「でも」 「のに」（逆接） 助動詞「みたいだ」（推量） 「かもしれない」（可能性） 動詞「て」形＋「ある」	動詞「て」形 動詞「て」形＋から 動詞「て」形＋「いる」
第9課	接続助詞「と」（条件） 動詞「ば」形（条件） 動詞＋「たら」 動詞「ば」形＋「ならない」 動詞「ば」形＋「いけない」 「たほうがいい」 「ないほうがいい」		XにYがある・いる YはXにある・いる 助数詞・類別詞 動詞＋「たい」 動詞＋「たがっている」
第10課	動詞受身形 動詞使役形 「そうだ」（様態） 「らしい」（推量）		主観を表す表現「好き・嫌い・上手・ 下手・得意・できる」 XはYがZの構文 「の」「こと」による名詞化 動詞＋「ことがあります」
第11課	動詞「（よ）う」形（意思） 動詞＋「つもり」 「ようだ」（推量）		

第 12 課	動詞＋「なさい」 動詞命令形 動詞＋「な」（禁止） 尊敬語 動詞「て」形＋「くれる」 動詞「て」形＋「もらう」 謙讓語 動詞「て」形＋「あげる」		
第 13 課	動詞「て」形＋「おく」 動詞「て」形＋「しまう」 動詞「て」形＋「みる」 動詞「て」形＋「いく」 動詞「て」形＋「くる」 動詞「ます」形＋「はじめる」 動詞「ます」形＋「かける」 動詞「ます」形＋「つづける」 動詞「ます」形＋「おわる」 動詞「ます」形＋「すぎる」 接続節「のに」		
第 14 課	動詞＋「そうだ」（伝聞） 動詞＋「ても」（譲歩） 動詞＋「まい」（否定意思） 動詞＋「ば」＋動詞「ほど」 助詞「さえ」＋動詞「ば」 形動詞「ば」形＋「も」		
第 15 課	尊敬語 謙讓語		

● 序章

まず、3つの教科書に共通していることは、いずれも初級の学習者を対象とした教科書であるということだ。したがって、序章では、いずれの教科書でも、まだ、日本語に一度も触れたことがない学習者を対象にした、簡単な日本語概論が記されている。日本語がどのような言語であるかを類型論的観点から述べ、発音や正書法を大まかに説明し、ひらがなとカタカナの表を載せ、漢字の部首や書き順などについて記述している。

● 各課の内容

まず、「各課の構成」から見てみよう。一見して分かるのは、Higashi & Oguma とそれ以外の教科書の違いである。Higashi & Oguma では、ごく（ひとつ、もしくは2つの）短い数行の会話でそれぞれの課が始まる。それぞれの会話には簡単な注があり、大体の内容が分かるようになっている。新出文法事項は、ごく少数に限られており、そして会話の直ぐ後に表やスキーマ化して示される。また、練習問題も、文法だけではなく、聞き取りや、ロールプレイといった会話、聞き取り、読解、作文というように、まんべん

なく全ての技能を磨くための練習問題が出されていることである。また、CD が付属しているのもこの教科書だけである。さらに、文法説明が各課の最後に回されている点、各課に「言語と社会」というコーナーが設けてあり、社会言語学的な知識もつけられるようになっている。フランス語は文法や語彙などの理解を助けるための手段にしか用いられておらず、基本的には日本語でのコミュニケーション能力をつけることがこの教科書の目的である。ちなみに、この教科書には、漢字のリストが全く載っていない。「書き」には力を入れていないことが分かる。

一方、他の 2 冊の教科書は、Higashi&Oguma とは全く異なる構成をとっている。導入部分の会話・もしくはテキスト（日記や新聞など）は、第 1 課から 1 ページ、あるいは 2 ページにわたる長文であり、しかも難解である。したがって、文法項目や語彙がぎっしり詰まっているテキストを読みながら、まず翻訳させることになる。練習問題は、穴埋めや翻訳、作文などの書きの練習を中心としたものであり、口頭練習としては、主に文型を定着させるためのパターン・プラクティスのみ。聞き取りや内容理解、ロールプレイなどのような練習問題は皆無である。CD も付属していない。また、漢字については、書き順や意味、読みをきちんと整理したリストが載っていることから、完全に「書き」に重点をおき、フランス語と日本語の間の翻訳をさせることを学ばせる意図を持った教科書であることが分かる。

さらに、語彙のリストについてみると、Higashi & Oguma は、語彙をテーマ別（店、職業、動詞、形容詞）に整理して与えているのに対し、他の 2 冊は、いずれも五十音順のリストである。前者では、語彙リストは実際のコンテキスト上、使用しながら覚えるために作られているのに対し、後者では、語彙リストは、テキストに出てきた単語の索引という役割を果たしている。

- 文法項目

さて、各課で習う文法項目を見てみよう。一目で、Higashi & Oguma ではごく限られた文法項目の学習にとどまっていることが分かる。さらに、一般動詞と形容詞の過去形などは 2 つ以上の課にまたがって重複して取り上げられていることから、同じ文法項目を繰り返すことに重点が置かれている。文法面での学習者の負担は少ない。

一方、他の 2 冊では、その倍近くの文法項目が一冊の教科書の中に詰め込まれている。その文法項目を見ると、日本語能力検定試験でいうところの N4 までの内容が全て網羅されていることが分かる。

Cholley & Shimamori では、文法項目のやさしいものから難しいものへと順次導入されており、この導入の順番は、大体多くの教科書に見られるものと大差はない。「X は Y です」にはじまり、疑問代名詞、指示代名詞、指示形容詞などが導入され、「ある」「いる」の動詞、そして動詞一般、形容詞、形容動詞、用言のテ形、タ形、ナイ形、連体修飾節、話法、動詞の可能形、意志形、受身、使役、使役受身という順序で導入されている。また、文法の説明については、フランス語で詳しく説明されていて、学習者はそれを読めば、一人でも学習できるようになっている。

一方、Délteil, Seko & Takei では、各課に現れる文法項目が、非常に多く、第 1 課から、基本的な構文に加えて、用言と体言の違いから、常体・敬体の話し方の違いまでが出てきてしまっている。各課の目玉となる文法事項があまりはっきり見えてこない。難易度の高い項目と低い項目がかなり入り混じった内容になってしまっている。各課の冒頭のテキストを理解するために、必要な文法項目の説明は非常に詳しく、綿密に与えられているが、その文法項目を実際に身につけて、実践的に使えるように配慮されていないといえる。

7. 最後に

以上がフランスで出版された 3 つの代表的な大学教育向けの教科書の比較である。以上に見るように、フランスで出版され、かつ、大学の授業の教科書として使われている教科書はごく少数である。フランスの多くの大学では、日本で出版されている教科書か、英語で書かれた教科書が使用されている。

今後の課題として、実際に大学で使用されている教科書がどのような基準で選ばれているのか、日本や他の国で出版された教科書をフランスで日本語を勉強する学習者が使うメリットとデメリットは何か、教科書を作るうえで、とりわけフランス人学習者にとって必要な点はあるのか、といったことについてさらに調べてみたいと思う。

参考文献

CHOLLEY Jean & SHIMAMORI Reiko (1990) *Cours de japonais*, Bonjinsha

DELTEIL André, SEKO Yuriko & TAKEI Yuki (2006) *Japonais, manuel de première année*, Publication de l'Université de Provence

GARNIER Catherine & MORI Toshiko (1985) *Le japonais, sans peine*, tome 1, Assimile

HIGASHI Tomoko & OGUMA Kazuo (2006) *Parlons Japonais*, nouvelle édition, Presses Universitaires de Grenoble

KUWAE, Kunio (2010) *Pratique du Japonais*, L'Asiathèque

SHIMAMORI Reiko (1997) *Grammaire Japonaise Systématique (2^e édition revue et augmentée)*, J. Maisonneuve

SHIMAMORI Réiko (2001) *Grammaire Japonaise Systématique, volume 2, Les expressions verbales et les expressions de la politesse*, J. Maisonneuve